江戸時代の最新メディア

浮世絵で学ぶ お江戸子育て

1986年から子ども文化の研究のために、子どもに関連する浮世絵や歴史史料の収集と研究を続けている公文教育研究会。広報の内山岳志さんに、浮世絵から読み取れる江戸の子育て事情を教えていただきます。

子宝遊

歌川国貞　天保(1830-44)頃

季節の風物と共に日常における母と子の何気ない関わりを描いた「子宝遊」と題した連作の中の一枚。縁先に置かれた富士講にちなむ小さな祠(ほこら)や、子どもが手にする「御祭礼(ごさいれい)」の幟(のぼり)などから、6月をテーマにしたものと思われる。描いたのは幕末から明治にかけて活躍した浮世絵師、歌川国貞。

暑さ対策

江戸時代の暑い夏 暮らしの中の涼をとる工夫

雨が多い梅雨の時期は寒暖差が大きく、梅雨が明ければ、今度は猛暑日が続く夏本番。この時期は子どもの服装や寝具選び、クーラーの使い方などに神経を使う季節です。そこで今回は、子どもと一緒に暑い夏を乗り切る工夫を、浮世絵から学んでみましょう。

今回の浮世絵はちょっと穏やかではありませんね。兄と妹でしょうか、二人で髪や口元をつかみあってのけんかをしています。お母さんはそんな二人の間に入って取りなしますが、その背中に負ぶわれている下の子は、お祭りの幟を振って大はしゃぎです。子どもが元気なことはよいことですが、それを見守る親はいつの世も大変です。

さて、上部に描かれている植物のようなものは釣忍(つりしのぶ)です。乾燥に強いシダ植物を鑑賞用に形よく整えたもので、シダの鮮やかな緑が目から涼しさを感じさせてくれます。軒先に吊るされ、涼やかな音を奏でる風鈴と同様に、五感に働きかけて涼しさを演出してくれます。

次に、ままごとのまな板の上やお皿の上にある紅白の長細いものに注目です。これは色ところてん。夏を迎えると、江戸の町には「ところてんやァ、かんてん（寒天）やァ」という売り声が聞こえはじめます。ところてんのつるりと気持ちよいのど越しは、暑い夏のおやつにもぴったりです。

また下の方には、けんかをする前に遊んでいたのでしょうか、水鉄砲や手桶といった水遊びのおもちゃも描かれています。本格的に行水をするとなるとちょっと大変ですが、手足に水がかかる程度の水遊びでも涼しさは十分に感じられます。

クーラーがなかった江戸時代の涼をとる工夫、皆さんの参考になりますでしょうか。

江戸ミニ知識

ままごとの「まま」って何？

この絵にも描かれている「ままごと」は、今も昔も子どもに人気の遊びです。しかし、ママの真似をして遊ぶから「ママごと」と呼ばれているわけではありません。「まま」はご飯を意味する「まんま」からきており、漢字では「飯事」と書きます。そしてその起源は、なんと平安時代にまでさかのぼるそうです。千年の時を超えて、子どもたちに遊び継がれていると考えると、「ままごと」もちょっと違って見えますね。

日本の
伝統的な子育て事情を
お伝えすることで
現代の子育てを応援します

KUMON
×
Happy-Note

ここで紹介した作品はウェブサイト「くもん子ども浮世絵ミュージアム」https://www.kumon-ukiyoe.jp でもご覧いただけます。

【文・写真提供●公文教育研究会】